

## 2. 小型円盤状石器について

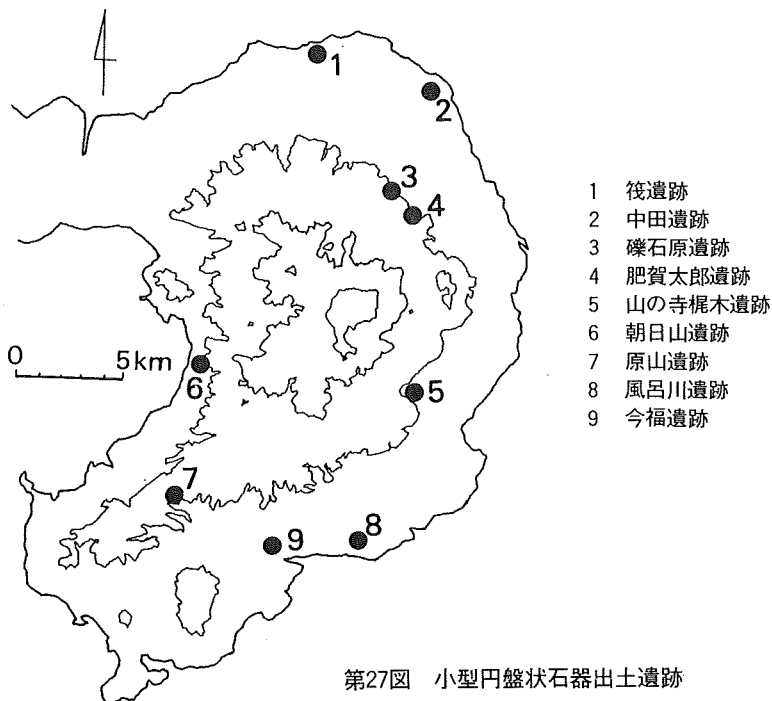
石器のところでも述べたように、本遺跡から、円形もしくは卵形に近い平面形を呈した扁平な石が7点出土している。1層（表土）から1点、2層から4点と3層から2点で、出土層位や伴出土器などから、縄文時代晩期に伴うものと考えられる。隣近する礫石原遺跡を中心とした周辺の縄文時代晩期の遺跡のなかにも何点か同様のものがみられ、これまで大方の場合は磨石または敲石として処理されていた。従って、ここでは磨石・敲石と区別するために一応、仮称を与え「小型円盤状石器」としてあつかい、他の遺跡などの資料も参考にしながら、幾つかの機能および用途等を考えたい。

先ず出土報告のある遺跡の伴出土器・石器についてみてみたい。第26図に類似・近似する資料として、刊行された報告書から抜粋し記載した（各報告書からの縮尺はほぼ同一に揃えた）。

1・2は筏遺跡<sup>註6</sup>（国見町神代東里筏、所在）。西平式・三万田式・御領式土器および石鏃・スクレイパー・扁平打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石と伴出。

3は中田遺跡<sup>註7</sup>（有明町池田名中田・下土・桑先、所在）。御領式土器を主体に、石鏃・扁平打製石斧と伴出。

4・5～11は礫石原遺跡<sup>註8</sup>（島原市礫石原町から有明町大野名字一本松、所在）。黒川式土器が主体をなし、石鏃・石匙・スクレイパー・（扁平）打製石斧・石皿・砥石・凹石等と伴出。



12～18は肥賀太郎遺跡（島原市北千本木町字肥賀太郎，所在）。黒川式土器を主体に石鏃・スクレイパー・使用痕ある剥片・打製石斧・磨石・敲石・砥石と伴出。

19・20は朝日山遺跡<sup>註9</sup>（小浜町北本町，所在）。山の寺式土器を主体に石鏃・スクレイパー使用痕ある剥片・扁平打製石斧・磨製石斧・砥石・磨石・敲石と伴出。

21～25は山の寺梶木遺跡<sup>註10</sup>（深江町山の寺，所在）。山の寺式土器を主体に石鏃・スクレイパー・（扁平）打製石斧・敲石・凹石等と伴出。

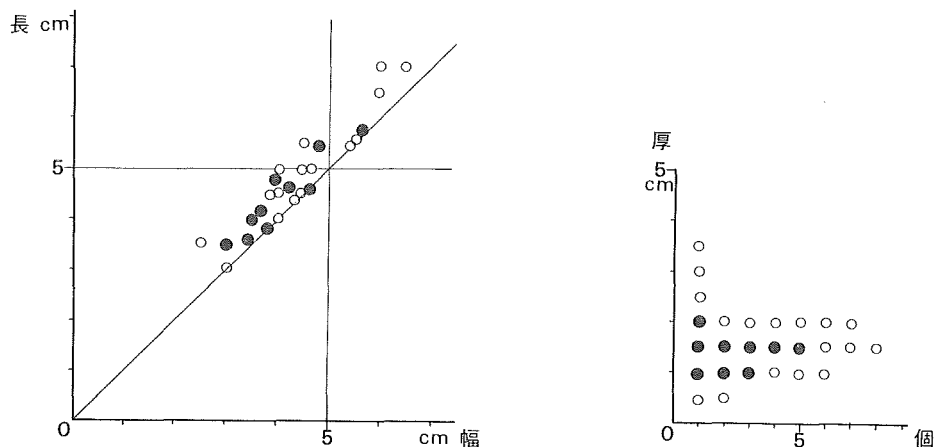
20は原山遺跡<sup>註11</sup>（小浜町坂上下名字新田・字原・尻川，所在）。支石墓が群集する。原山式土器を主体に石鏃・石匙・扁平打製石斧・磨製石斧等が伴出。

### (1) 平面形・規模について

第27図に記載した26点の長さと幅を計測しその長幅比をグラフ化してみた。本遺跡分も含め遺物の計測が直接できたものは4と12～18の8点，報告書に数値記載のあったもの42・43の2点で計10点は正確な数値である(●)。そのほかは報告書の図面から計測した数値である(○)。

グラフからみると，おおよそ1：1に近く，5 cm 前後の直径を持つ。換言すれば，直径5 cmの円形に近い平面形を呈しているといえる。このことは石器の上下の意識は薄く円形を基にしたラウンド的な石器が考えられる。また，厚さについてもグラフ化したところ1～2 cmにかけて多いことがわかる。

なお，時代や材質は異なるが，円盤状として報告された遺物は他にも，風呂川遺跡<sup>註12</sup>（西有家町風呂川，所在）では「円盤状陶磁製品」として須恵器片や陶磁器片を利用して円盤状に加工した遺物の出土報告が，今福遺跡<sup>註13</sup>（北有馬町今福名，所在）では「円盤状土・陶磁製品」として弥生土器片や近世陶磁器片・瓦片を利用した遺物の出土がある。これら報告書において「縄文時代から連綿と続く『遊戯具』としての用途想定」もなされているようである。



第28図 小型円盤状石器長幅比・厚さグラフ

## (2) 石材について

第26図からの判断にまかされる部分も多いが、砂岩と安山岩が使用されている例が多い。本遺跡分は全て砂岩製であるが、その原産地を確定するには至っていない。

## (3) 使用痕と破損状況

報告書中に石器の観察記載があったものは少ない。従って、多くは図面記載しかなく、不明な点が多い。本遺跡のものを主体に考えるならば、表裏とも滑らかな感じで周縁に敲打痕を残すものがほとんどである。報告書記載があったものは4「表裏ともに中央部周辺に摩耗した状態を残す…」、19「全体に丸味を持つ。側面部に敲打痕」、20「一端に敲打による割れ」、の3個であった。全体的に摩耗もしくは自然面によるものかである。つまり、滑らかな表裏であることと、周縁部は敲打痕が認められることはいくつかに共通する要素のようである。しかも、12と20の2点は敲打によると考えられる剝落面が認められることから、敲打器としての機能をより強く持つものか。もし、敲石としての機能を考えた場合、この石器より得られる打撃は推測されるところで、コツコツといった手先の動作であろう。また、タイ北部の山村では黒色の磨製土器製作にあたり土器の表面の光沢を得るために丸く滑っこい石で土器の表面を丹念にみがく、との民族例報告もある<sup>註14</sup>。

以上のように、現在までに報告されている資料としては本遺跡分も含めて20数点である。共出する土器から判断されることは、おおよそ縄文時代後期後半から晩期にかけてのものであることがわかる。この時期は縄文式土器のなかでも黒色研磨土器の存在と一致し、特にその出現が磨消縄文系土器群から黒色研磨系土器群への移行期にあたる西平式土器・三万田式土器に認められることは注目される。しかも、この時期の特徴的な石器に扁平打製石斧のあることも見逃せない。また、これらの遺跡の立地が県内でも、島原半島に限られた結果を今日まで提示しており地域的な要素もうかがえる。繰り返しになるが、島原半島北東部には縄文時代晩期の遺跡が多く、大遺跡である礫石原遺跡を抱える。飛躍して考えるならば、ここで「小型円盤状石器」として仮称した石器は縄文時代後・晩期を中心とし、この時代に種々に認められる遺跡の農耕的性格の一端を担う石器である可能性も考えられる。

今回、小型の敲石・遊戯具・土器の研磨具などの使用・用途を想定したが、どれも積極的根拠に薄く、終始問題提起に終わってしまった。今後資料の蓄積が待たれると同時に遺跡における遺物全体としての組成の問題や、より詳細な観察・分析が求められよう。